本を読む男

「うちにある本は全部読んでしまったから、図書館行ってくるわ」
と、鷲羽が言った時、
（親父の書庫にある、膨大な本を鷲羽ちゃんはいつの間に読んでいたんだろう）
天地は驚き、目を、丸くした。
「住民カードとか無い、あたし達は、本は借りられないけど、まあ見るだけならね」
「良いなー図書館。砂沙美も行ってみたいなあ」
「じゃあ砂沙美ちゃんも行く？魎皇鬼も連れて行くから、砂沙美ちゃんが行く気がある
なら行きましょう」
「わーい！」
「宜しいんですの？鷲羽様。ご迷惑では…」
心配する阿重霞に、
「なんのなんの。魎呼ちゃんと阿重霞殿を連れて行くよりずっと楽だわ」
と笑顔で切り返す鷲羽。阿重霞の顔が苦笑いのまま凍りついたのを、天地は見逃さなか
った。あわや一触即発という空気を塗り替えたのは美星だった。
「じゃあ、私も行きますぅ」
美星がそう言うので、鷲羽の顔が一瞬固まった。
「美星殿が来ても退屈なだけかもよ」
「えー。でも、私、日本のご本を沢山読んでみたいんですよ」
「良いじゃありませんか。地球の文化を知るのも大切な事ですわ。ね、鷲羽様」
にこやかだが、有無を言わさぬ阿重霞の前に、鷲羽は何も返す言葉が無かった。結局、
鷲羽は渋々、美星も連れて行くことにした。
「本当に、鷲羽様って嫌味な方！」
鷲羽達が出掛けた後で、阿重霞は憤慨した。
（どっちも良い性格しているよな…）
と、天地が思ったのは、勿論、阿重霞には内緒である。

天地は改めて、父親の書庫へ入ってみた。小説、実用書、エッセー、写真集、辞書に
哲学書、そして漫画。これほどまでに、父親が本好きだとは天地にはどうしても思えな
かった。
（本が好きというより、蒐集が好きなんだろうな）
埃の被った本棚を指でスッと拭う。いつ来ても此処は黴臭く、埃っぽい。
天地は本棚から一冊、本を抜き、手に取ってみた。
「へえ。親父の奴、歴史小説や推理小説ばかりではなく、エスエフも読むんだ」
父の意外な一面を知った気がして、天地は壁に背を凭れると、頁を捲った。

（いま、宇宙人と同居しているのに、エスエフ小説読むのも変な話だよな）
天地は可笑しく思った。

最初のうちは、ぼんやりと頁を捲っていた天地だったが、次第に頁を捲る手が早くなっていった。元来、勉強があまり得意ではない天地は、読書も勉強に似ている気がして、あまり手をつけて来なかった。けれど、この歳になったせいか、或いはこの歳まで読書をしていなかったせいか、久しぶりの本の世界は新鮮で、心躍る時間となった。
夢中のうちに時間は過ぎた。そのため、いつの間にか隣に居た魎呼の存在に、天地が気付いたのもだいぶ後になってからだった。
「魎呼。…いつから居たんだ？」
「二十分くらい前」
「え？そんなに前からか」
「だって、お前、本に夢中になってたからさ」
魎呼は口を尖らせた。
「そっか…。ごめんな。何か久しぶりに本読んだら、面白くてさ」
「別に良いよ」
魎呼は気にしてないさと笑った。魎呼が怒っていないと分かると、天地はまた本の世界へと戻ったが、魎呼はそのまま隣に居る。数行読んだところで、天地は顔を上げた。
「あのさ、どうかしたのか？何か俺に話しでもあったんじゃないのか？」
魎呼に尋ねてみたが、魎呼はあっさりと違うと答えた。
「話？んなもん無いよ」
（じゃあ、どうして此処に居るんだろう）
天地は不思議に思った。魎呼は本棚をぐるりと見渡すと、天地の横顔に視線を戻した。
再び天地が本から顔を上げると、
「あたし邪魔か？」
困った様な顔をした。
「邪魔じゃないけどー」
（でも何で此処に居るんだろう？）
魎呼に訊いてみようか迷っていると、魎呼が先に天地に言った。
「天地が気が散るんだったら、戻るから」
珍しく、殊勝な魎呼の言葉に天地は驚いた。
「いや、良いんだけど…」
隣りで熱心に横顔を見つめられるのは、かなり照れる。魎呼は意図してそうしているのだろうか。それとも、ただ見ているだけなのだろうか。
「にしてもさ、凄い本の数だよな」
飽きたのか、魎呼が天地に話し掛けて来た。

「ああ」
「あの親父がこんなに本読むとも思えないけどな」
魎呼の言葉に天地は嬉しくなった。
「魎呼もそう思うか？」
「そりゃあそう思うだろうよ、相手はあの親父だぜ？」
魎呼が笑ったので天地も釣られて笑った。
　天地は本を閉じた。
「良いのかよ、本」
「うん、後で読むよ」
本は後でじっくり読めば良いと天地は思ったのだが、魎呼はつまらなそうな顔をした。
「あ、そうだ、魎呼も何か本読むか？」
　軽く提案すると、
「本なんか読む気ねぇよ」
案の定、魎呼は面倒臭そうに手を振った。
（だよな…魎呼は読書とか落ち着いて何かに取り組むことには向いてないもんな）
天地は心の中で苦笑いしたが、魎呼は立ち上がると、
「でも、お前が昔読んだ本なら良いかもな」
ぐるりと辺りを見渡し、天地に笑いかけた。
「え？俺が読んでた本？」
「ほら、魎皇鬼が持っていたような…」
「ああ、絵本か」
「そう、それ。ああいうのなら、面白そうだよな。後は砂沙美の読んでいたような少女漫画って奴」
（漫画は皆、結構読むんだよな…。親父も変な趣味あるけど、皆も変わってる）
天地は、少女漫画の良さが今ひとつ理解できなかった。そもそも何故に父親があんな本を持っているのか…それについては、敢えて詮索しない事にしていた。
「この辺にあったよな…」
　書庫の一番奥に、天地が読んだ絵本達はひっそりと置かれていた。魎皇鬼は以前、此処から持ち出していたが、今では鷲羽や美星が買い与えているものを読む事が多い。
　天地は本棚に置かれた背表紙を眺めながら、一冊一冊、魎呼に手渡した。どれも埃っぽく、表紙や頁が破れている。
「懐かしいな…。随分、じっちゃんに読んでもらったりしたよ」
「ふうん。これなんだ？」
「桃太郎。岡山が舞台だからか、桃太郎関係の絵本とか多いんだよな」
と、言いつつ、じっちゃんはもしかしたら、この頃から俺に、強い男になれと暗示を掛けていたのだろうかとも思った。

「天地、これなんて読むんだ？」
「どれ…ああ、これは…オニだよ…」
一瞬、天地は複雑な感情になった。カタカナで書いてあるものの、それは紛れもなく鬼の絵であり、「オニ」という言葉だった。
（魎呼って、鬼って言われていたよな…）
魎呼の顔を伺ったが、魎呼は絵本を膝に乗せ、珍しいものを見るように頁を捲っている。
「鬼ってさ…」
「ん？」
「あたしの事だよな？」
「えっ」
（気にしていないのかと思ったら、やっぱり気にしてんのかな？）
天地が再び魎呼の顔色を伺っていると、魎呼がチラリと天地の顔を見た。
「何だよ、変な顔して」
「いや、あのっ、だって…」
「フン。今更何とも思わねぇよ。オニって、こういう字なんだな」
「これは、カタカナだけどな」
「カタカナ？」
魎呼は確認するように天地に尋ねた。天地は魎呼にカタカナで書く時と、平仮名と、漢字を教えてやった。
（これじゃあ、小学生の授業だよな）
「ふーん。色々あるんだな」
「魎呼だって、少しは字、読めるんだろう？」
「此処の字にはまだ慣れてねぇよ」
「そっか…。この絵本で勉強するか？」
「天地、あたしを莫迦にしてんのか？」
「ハハ、だよな」
「あたしは、こんな本じゃなくて、ちゃんとした本で読めるようになってんだよ。カタカナってのは初めて見たけどさ」
（…魎呼が勉強？いつしてるんだろう。それに何の本で？）
　天地が悩んでいると、魎呼が本棚から一冊の絵本を取り出した。他の本よりも汚れも酷く、頁もバラバラになっていた。
「これでも本なのか？」
天地はそれを見た途端、懐かしくなった。まるで、幼少の頃に戻ったかの様に、自分の周りの空気までもが変わった気がした。
「その絵本！」
「うん？」

「これ、母さんに読んで貰ってたんだよ。その後、じっちゃんや父さんが読んでくれたっけ」
表紙の字はもう読めない程ボロボロだが、天地は懐かしく、嬉しく表紙を指でなぞった。
魎呼がその天地の横顔を、幸せそうに穏やかな顔で見ている事に天地は気が付かなかった。
「読んでくれよ、天地」
「俺が？」
「うん。あたしじゃきっとまた字が読めないかもしれないからさ」
「…うん」
天地はそっと魎呼に読み聞かせてやった。遠い昔に母の声で読んでもらった物語。ある男の子が動物達と共に冒険をして成長をして、悪者に捕らえられたお姫様を救い、可愛いお姫様と結婚する物語。
「天地も、こんなふうに強い男の子になれるわね」
と、言った母の言葉。
「なれるかな？」
母の顔を見上げると、ふんわりと母は笑って、大丈夫よ、きっとなれるわと頭を撫でてくれた。そしてぎゅっと抱きしめてくれた。
天地は読みながら、あの日の風景や母の温もりも思い出していた。本を広げると、次々と思い出が溢れて来る。
気が付くと、涙が零れそうになっていた。魎呼がぎゅっと天地の手を握る。驚いて、天地は魎呼の顔を見たが、魎呼は天地に優しく笑いかけた。母の顔と重なる。
「続きは？読んでよ、天地」
「うん」
天地はところどころつっかえながら、朗読していった。思い出と懐かしさと切なさが溢れた午後の時間は、ゆっくりと過ぎて行った。

「はい、阿重霞殿」
天地と魎呼が書庫から出て来ると、帰宅した鷲羽がにっこり笑顔で、阿重霞に分厚い料理本を差し出していた。
「これ、日本の地方ごとのお料理が紹介されている辞典なのよ。これはまだ一巻だけど、あと二十巻分あって、全部予約して来たから」
「予約って…住民票も無いのにカード作れたんですか？」
「うん、鷲羽お姉ちゃんが作ってくれたから、砂沙美も魎ちゃんもご本借りられたんだよ」
砂沙美が本を見せ、魎皇鬼がカードを自慢気に見せた。
（作ったって…それ、偽造じゃないのか？）

天地は思ったが、後々大変な事になるので、それについては触れない事にした。阿重霞と鷲羽は目を合わせて互いにニッコリとしている。
「鷲羽様、幾らなんでも二十巻は多すぎじゃありませんこと？」
「あら、一気に読む訳じゃないんだし、それに地球の文化を知るのも大切だって阿重霞殿、言ってたでしょう？」
「そ、そうでしたわね…ほほほほ」
「そうでしょう、ははは」
二人の高笑いは永遠続いたが、勿論、その目は笑っていなかった。

天地は部屋に戻ると、エスエフ小説の続きを読むことにした。すると、また壁抜けをして魎呼が現れた。
「最近、すぐ部屋に来るな」
「何だよ、あたしが部屋に来たらまずい事あんのかよ？」
「無いけどさ…」
（用事があるならハッキリ言ってくれれば良いのに）
天地がそう思っていると、魎呼は先程の様に天地の隣に腰を下ろした。
「な、天地。邪魔しないからさ、此処に居て良いか？」
「え、」
「手繋いで、此処に居るだけで良いんだけどさ…」
照れ屋なのに、すぐにくっついてくる魎呼にしては珍しく、オドオドしていたので、天地は何だか可笑しくなった。
「いいよ」
「あんがと」
片手で魎呼と手を繋ぎながら、天地は本を読み進めた。時折り魎呼をチラリと見ると、天地の横顔を見ていたり、天地の本を覗きこんでいたり、ぼんやりと天井を見上げていたりした。
それから暫く経って、コトンと左肩に何かが触れた。天地が見ると、いつの間にか寝てしまった魎呼が天地の肩に凭れてきたのだった。
「仕様がないなあ」
手を離し、毛布を掛けてやろうと思ったが、魎呼が起きてしまいそうなので、天地はもう少しそのままで居る事にした。
（今度、この本を読む時は、この情景を思い出すのかな…）
頁を捲りながら、天地は魎呼の温もりと、健やかな寝息を感じた。